

C-11 乳幼児期における健康づくりに関する調査研究
秋田短大 田中玲子

目的 現代生活がめざましい発達を遂げることによって、心理的緊張は増大しているが、日常生活は調和のとれた身体発達に必要な筋肉活動を充分に与えてくれていない。環境によって大きく左右される幼児の発育は、過保護、運動不足、肥満、偏食、少食、虫歯、骨折と虚弱化が問題にされている。子どもがたくましい体力をもち、充実した成長発達を遂げさせるにはどうしたらよいか、子どものおかれた環境、実態などを調査し、これを通して子育ての基本を考え、保育する者の役割りを認識したい。

方法 秋田市内の幼稚園ノケ所291名、農村部の南秋田郡の3保育所361名、山間部の山本郡の2保育所78名、合計730名の園児の母親に調査用紙を渡し記入してもらった。

結果 ①はいはい動作をしない赤ちゃんが10%代みられたが、はいはいは歩行の準備として重要であるから歩行器に閉じこめない方が望ましい。②友達は、2～3人が一番多いということはこじんまり遊んでいる傾向にあると考えられるので友達が多い方がよい。③親自身、健康や体力づくりについての意識が低いので子どもは屋外へ連れ出し、自然に親しませ、木登りや自転車乗り、散歩など体力づくりの日常生活を習慣化させることが必要である。④偏食の子どもが多くみられるが、食物の好き嫌いが自我の発達とも関係があるので、幼児でも理解できるような栄養指導をする必要がある。⑤家庭環境は、都市は親子4～5人という核家族が多く、農村→山間部に行き次第祖父母との同居が多くなっており、家も広がっている。⑥山間部の子どもはテレビを長時間見ている傾向が強く、就寝時間も遅い。又入浴の頻度も少ないという面があるので習慣の改善の余地がある。